

現代ドイツにおける宗教の諸相 —雑誌『シュピーゲル』宗教関連記事の分析—

沼 尻 正 之

The Situation of Religions in contemporary Germany The Analysis of the Articles on Religion in "Der Spiegel"

Masayuki NUMAJIRI

要 約

現代のドイツにおいて宗教はどのようなかたちで主題化されているのか、そうした問題について本稿では、主にドイツを代表する総合雑誌である『シュピーゲル』に、2003年から2004年にかけて掲載された宗教関連記事を分析することを通して論じていく。具体的には、キリスト教、イスラム、新宗教、大衆文化という4つのカテゴリーを設定し、それぞれの中での宗教についての議論を整理し、その社会的背景について考察する。キリスト教については、教会の衰退という現象と原理主義の台頭などが、イスラムについては、公立学校におけるスカーフ問題やその背景でもあるイスラム原理主義などが、新宗教については、サイエントロジーなどの教団と社会との間の軋轢などが、そして大衆文化については、主に映画に表れた宗教的テーマなどが、それぞれ詳しく論じられる。これらの宗教に関する問題は、キリスト教圏である他の欧米諸国などと共有される側面も勿論持っているのだが、同時にそこには、ドイツ社会の特性が表れてもいるのである。他のヨーロッパ諸国と同様、伝統的にはキリスト教が主流の国家であるドイツにおいて、一方でキリスト教が信仰の対象としての特権的な地位を失い、他方でイスラムなどその他の宗教が社会に大きな影響を与えるようになってきた現在は、宗教的多元主義の時代へと向かう過渡期にあると見ることはできるのではないだろうか。

キーワード：ドイツ、宗教、『シュピーゲル』、キリスト教、イスラム、
スカーフ問題、新宗教、大衆文化

1. はじめに

2004年の8月から9月にかけて、本学の交換教員制度により、約1カ月半ドイツのゲッティンゲン大学で研究を行う機会を得た。本論文では、その際に得た知見などをもとに、現代のドイツにおける宗教の諸相について論じてみたい。そのためにここでは、ドイツを代表する総合雑誌である『シュピーゲル（Der Spiegel、以下本文中ではSpiegelと略記）』に掲載された宗教関連記事をひとつの手がかりとする。『シュピーゲル』は、週刊の総合雑誌という、日本には見られないタイプの雑誌であり、ドイツには他にも『フォークス（Focus）』や『シュテルン（Stern）』¹など類似のものがいくつかあるが、それらの中でも最も権威のある雑誌だとされている。また売り上げも平均で約112万部（ドイツ連邦共和国外務省編 [2003:396]）と多く、世論に対する影響力も大きい。毎号、特集・ドイツ・社会・経済・メディア・海外・学問・文化・スポーツなどのカテゴリーのもとに、多くの署名記事が掲載されており、ドイツ国内（および海外）で話題になっていることは、かなりの程度網羅されていると見ることができる。本論では、この『シュピーゲル』の2003年と2004年に発行された計104号の中から、宗教に関する記事をピックアップして、それをもとに現代ドイツにおける宗教的テーマについての考察を行うことにする。ピックアップした記事のリストは、巻末の〈表1〉に記載した。ただし、時期的にイラク戦争関係の記事がきわめて多く、それらの記事にはイスラムについての言及があるものも多いが、宗教自体が中心的な主題になっているのではないものは、煩瑣になるので省くこととした。

以下では、記事で取り上げられた事柄の背景にある社会の状況や変化、またそれと宗教との関係などを考察することを通して、現代のドイツにおける宗教の問題について考察していきたい。

2. 現代ドイツにおけるキリスト教

2-1 衰退する教会

ドイツにおいて中心をなす伝統的宗教は、言うまでもなくキリスト教であるが、その中でも多数を占めるのはカトリックとプロテスタントである。もう一つの大きなカテゴリーである東方正教会系のキリスト教の信者は、少なからずいるとはいえ、約90万人程であり、人口比約1%の少数派にすぎない。それでは、カトリックとプロテスタントそれぞれの宗教人口はどうなっているのだろうか。ドイツと言えばプロテスタントが主流の国というイメージが強く、実際ごく最近のものまで含めて、ドイツの宗教についてのデータを提供している日本の文献の中には、ドイツにおける最大宗派はプロテスタントであると記しているものが、しばしば見られる²。しかし現在それは事実と反する。REMID（Religions- wissenschaftlicher Medien- und Informationsdienst e. V.：社団法人宗教学メディア・情報局）が示している最新のデータ（「REMID」のHPを参照）によれば、ドイツにおけるカトリック人口は約2646万人、プロテスタント³人口は約2621万人と、カトリックの信者がプロテスタントのそれを、若干ではあるが上回っている（〈表2〉を参照）。宗教改革の祖であるルターを生み出したドイツは、個々の国の宗教

をそこにおける最大宗派で代表させる言い方をするならば、今や「カトリックの国」なのである。

こうした事態をもたらした原因の一つとして、近年における教会脱退者の数の多さが挙げられる（＜表3＞参照）。つまり、プロテスタントでもカトリックでも教会脱退者は多く、全体として教会は衰退傾向にあるのだが、とりわけ前者においてその数が大きいことが、元来はプロテスタントが多数を占めていた国の宗派構成を変えるまでの事態を引き起こしたのである⁴。このことは、カトリックよりもプロテスタントにおいて「世俗化」の影響が大きく作用すると見る、世俗化論の一般的文脈と軌を一にしている⁵。

このキリスト教会の衰退というテーマについては、例えばSpiegel [2003/02], [2004/23], [2004/42] やFocus [2004/16] などが論じている⁶。Spiegel [2004/23] は、ドイツのカトリック教会における司祭の不足が深刻な問題となっていることを報告している。既にインドやポーランドなど諸外国から1400人程の司祭を呼んでいるにもかかわらず、人手不足で、進歩派の中からは、司祭の資格を持たない平信徒が司祭の仕事をするのを認めるべきだという案が出されている。そうした状況下にあっても新たに司祭の資格を取る者の数は減り続けており、1990年に366人だったのが、2003年には161人にまで減少しているという。

またSpiegel [2004/42] は、ドイツの教会の経済的窮乏について詳述している。それによれば、ドイツ各地で教会は（プロテスタントでもカトリックでも）、信者数の減少による教会税収入の減少などから、経済的に行き詰まっており、外部コンサルタントの助言を受けて、様々なグッズを販売したり、大聖堂のてっぺんに携帯電話用のアンテナを立てたりなど、金儲けの方法を模索することでこの状況を打開しようとしているが、それでも近年はつぶれる教会が増加しており、例えばベルリンでは、今後4年の間に約25%の教会が取り壊されるだろうと述べられている。

ドイツの中でもとりわけ宗教離れが進んでいるのが、旧東ドイツ諸州である。＜表4＞が示すように、それらの地域では、旧西ドイツ諸州と比べて、明らかに世俗化傾向が強く見られる⁷。旧東欧諸国において、当時の社会主義政権は基本的にキリスト教に対して敵対的な政策をとったが、ポーランドなどのように、そうした時代にも国民の信仰心があまり衰退することのなかった国も存在した。しかし東ドイツでは、キリスト教やその教会に対する人々の信頼は、かなりの程度失われてしまったようである⁸。Spiegel [2003/02] は、ドイツにおけるキリスト教の伝道師たちが、ドイツ統一後、アフリカやラテンアメリカだけでなく、旧東ドイツ地域へ向かっていることを報告している。

こうしたキリスト教の衰退傾向に追い打ちをかけるようにして見られるのが、教会や聖職者をめぐるスキャンダルについての記事である。Spiegel [2003/21], [2004/08], [2004/29] などがそれにあたる。例えばSpiegel [2004/08] は、ある保守的なカトリックの司教へのインタビューというかたちで、独身制が原則のカトリックの司祭が隠し子を持つケースが多数あり、その数は数千人にのぼると推定されると指摘した上で、カトリック内部からも現在、こうした矛盾をもたらす独身制を見直すべきだという声が上がっていることを紹介している。

2-2 キリスト教原理主義

ドイツでは、前節で述べたキリスト教の衰退という事態と相反する傾向も、一部では見られる。キリスト教原理主義的な運動がそれである。キリスト教原理主義というと、すぐに思い出されるのはアメリカだが、その他のキリスト教諸国でもこうした動きは見られ、ドイツもまた例外ではない。そうしたことを話題にしているのが、Spiegel [2003/32], [2003/49], [2003/52], [2004/45] である。

Spiegel [2003/32] に見られる同性婚をめぐる論争は、主にカトリックの教義との関係に焦点が当てられている。論争のきっかけになったのは、ドイツ西部の都市トリーアのギムナジウムで宗教（カトリック）を教える女性教師が、レズビアンだという理由で科目の担当をはずされたという事件であった。ドイツでは（ヨーロッパ諸国の中では比較的遅いとはいえ）2001年に同性婚が法律で認められるなど、こうした点での差別は禁止されているから、この女性教師をめぐる措置は明らかに法律違反であるのだが、同時に、伝統的な性規範を重視する現在のローマ教皇を頂点とするカトリックの教義との関係が、大きな問題となったのである⁹。これは、与党と野党の政治家たちを巻き込んだ論争に発展した。国家の法律と国家を越える宗教的規範との対立は、現代社会においても解決困難な問題として立ち現れてきている。

国家の法律と宗教とが対立するという点では、Spiegel [2003/49] の記事も共通しており、こちらは宗教的理由で学校教育を拒否し、子どもの教育を自ら行おうとする人々について報告している。彼らが学校教育を拒否する理由としては、進化論が教えられていることなどが挙げられており、いわば典型的なキリスト教原理主義的発想がそこには見える。ただしこうした事例は、例えばバーデン・ヴュルテンベルク州で60件など、比較的少数にとどまっているという。

Spiegel [2003/52] は、世界に布教・伝道に向かうドイツの原理主義的クリスチャンについて論じている。記事によれば、現在外国にいるドイツ人伝道者の数はおよそ8700人だが、その中の約5000人が、福音主義者（Evangelikale）や聖霊降臨主義者（Pgingstler）など、プロテスタント原理主義の組織に属する人々である（その他約3000人がカトリック、約700人が伝統的なプロテスタント）。なおドイツ国内にいる福音主義者は約130万人、聖霊降臨主義者は約12万人ほどだという。この数は必ずしも小さくはないが、アメリカの場合のように国内政治に大きな影響を与える程の数にはなっていないことが、ドイツの原理主義者たちの目を海外に向けさせていると、記事は分析している。こうした原理主義的な伝道者たちは、多くの場合、開発援助を全面に押し出しながら途上国の貧しい村などに入っていく、そこに住む人々をキリスト教に改宗させていく活動をしているが、そうしたかなりの強引さを伴う伝道・布教には、伝統的なカトリックやプロテスタントの教会から、現在批判の声が上がっているという。

ところで、このSpiegel [2003/49], [2003/52] などが取り上げているのは、プロテスタント原理主義の動きである。2-1でも述べた通り、全体としてはプロテスタントでは信者の教会離れ

が急速に進んでいるにもかかわらず、他方でこのような原理主義的な動きが見られるのが興味深い点だと言えるであろう。ただし、こうしたプロテスタント原理主義の台頭という現象自体は（周知のように）アメリカなどでも顕著であり、必ずしもドイツに特徴的な出来事ではない。ドイツで上述のような一見矛盾する動きが生じていることは、プロテスタンティズムという宗派の根本的な性格と関係している。かつてヴェーバーが論じたように、宗教改革によって誕生したプロテスタンティズムは、世界の「脱呪術化」をもたらし、それがいわば「意図せざる結果」として世界の「脱宗教化」、つまりは社会の「世俗化」を引き起こすこととなった¹⁰。しかし別の見方をすれば、ルターらによる宗教改革とは、キリスト教の原理に今一度立ち戻るといった趣旨の運動だったのであり、そこには現代の原理主義につながる傾向が潜んでいたのがあった。

2-3 バチカンへの関心

先述のように、現在ドイツで最大の宗教勢力であるカトリックは、多宗派が併存するプロテスタントと異なり、バチカンを中心とする厳格なヒエラルキーを形成している。したがってバチカンの動向は、ドイツのカトリックに直接的な影響を及ぼすものであり、必然的にそれに対する関心も高くなる。Spiegel [2003/03], [2003/17], [2003/42] などが、バチカンの問題を取り上げている。

Spiegel [2003/42] がテーマとしているのは、健康状態への危惧が囁かれて久しい、現ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の後継者の問題である¹¹。ローマ・カトリック教会のトップであり、神の代理人と位置づけられる法王のポストは基本的に終身職で、新しい法王は、現法王の死後に開かれるコンクラーベ（法王選出選挙）で、複数のパピビリ（法王候補者）の中から選出される。関心の焦点は、再びイタリア人ではない法王が生まれるかどうか（現法王はポーランド人であり、イタリア人以外がその地位についたのは実に455年ぶりのことであった）ということと、保守派とリベラル派のどちらが勝利を収めるかということにある¹²。その人柄やカリスマ性から世界的な尊敬を集めるヨハネ・パウロ2世は、しかしながら同時に伝統的規範にこだわる保守性（とりわけ性規範についてそれは顕著である）がしばしば批判の対象ともされてきた人物であり（Spiegel [2003/32] など）、次期法王が保守・リベラルいずれの陣営に属する人になるかは、カトリック全体の将来にとって重要な意味を持っている¹³。もちろん次期法王の問題はカトリックの信者たちにとってだけ重要なわけではない。冷戦時代末期およびそれ以降の世界において、現ローマ法王の果たしてきた政治・外交的役割は極めて大きなものであり、こうした傾向は次期法王にも少なからず引き継がれることが予想されるから¹⁴、この問題は宗教を越えた広い関心の対象となっているのだと言えるであろう。

3. 現代ドイツにおけるイスラム

3-1 スカーフ問題

現在のドイツで、キリスト教と並んで、もしくはそれ以上に話題になることの多い宗教は、現在国内に約330万人の信者がいる¹⁵と言われるイスラムである。それは、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ以降顕著になり、2003年のイラク戦争によって決定的になった。しかし、そうした「大事件」だけがきっかけになったのではなく、トルコ人移民をめぐる諸問題との関連や、パレスチナ紛争をはじめとする中東情勢との関連などで、以前からイスラムに対する関心は高かったと言える。そうした中、2003年以降ドイツの国内問題として特に注目を浴びたのが、いわゆる「スカーフ問題」である。

ムスリム女性が頭部を覆うために着用するスカーフは、ヨーロッパ諸国に居住するムスリムの数が増えるにつれ、次第に社会問題化するようになった。ここではまず、日本でもメディアなどに大きく取り上げられたフランスにおける類似の問題を概観した後、それとも比較しながらドイツにおけるスカーフ問題を見ることにしたい。

3-2 フランスにおけるスカーフ問題

500万人近いムスリム人口をかかえると言われる、ヨーロッパ最大のムスリム大国フランスで、最初にムスリム女性のスカーフが社会問題となったのは、1989年のことであった。パリ北部の公立中学校で、スカーフを身に付けて登校した女子生徒が、校内に入ることを拒否されるという事件が起こったのである¹⁶。この時は、この問題について比較的寛容なかたちでの決着を見たのだが、異論が多かったことからその後も議論が続き、ついに2004年初頭には「公立学校における宗教的シンボル禁止法」案が圧倒的多数の賛成を得て可決され、同年9月に施行された¹⁷。この法案が圧倒的な支持を得た背景には、フランスにおける「ライシテ（世俗主義）」の原則がある。ライシテの原則とは、国家と教会との厳密な分離を意味するものであるから、国家の公的な領域は非宗教的でなければならず、公教育の中に宗教的要素が入り込むことは認められないということになる。これを定めた1905年の「諸教会と国家の分離に関する法律」（通称「政教分離法」）は、フランス革命以来の共和派の伝統に基づくものであり、いわばフランス国家存立の柱の一つである。フランスは、ヨーロッパの中でも最も政教分離の原則を厳格に保持している国である。つまりライシテの原則は、政治的なスタンスのいかんに関わりなく、重視されるべきものである。

その上でさらに、右派の政治勢力は、元来フランス社会にとって異質なイスラム系移民に対して不寛容な傾向、もしくは潜在的な排斥感情があるため、スカーフ着用に対しても批判的になる。他方で左派はどうかというと、彼らは一般にはマイノリティの人権などを擁護する立場を取るのだが、この問題については右派同様に批判的な見解を示した。なぜなら、彼らにとってイスラムは女性差別的な宗教であり、スカーフは女性を抑圧するイスラムのシンボルと見なされるからで

ある。つまり弱者の人権を重視するからこそ、ムスリム女性のスカーフは認められないという結論になるのである。

3-3 ドイツにおけるスカーフ問題

ドイツでもフランスと同様に、公立学校におけるスカーフ着用が社会問題となっている。ただしフランスの場合と異なっているのは、生徒ではなく教師、しかも一人のムスリム女教師のスカーフ着用が問題となっていることである。このアフガニスタン出身の女教師フェレシュタ・ルーディンは、現在のドイツにおけるスカーフ問題の象徴的存在となっている。この問題を取り上げているのが、Spiegel [2003/26], [2003/40], [2003/43], [2003/45], [2004/43] などである。

Spiegel [2003/26] は、反イスラム原理主義の立場に立つフェミニストのアリス・シュヴァルツァーの、この問題についての見解を掲載している。ルーディンがスカーフを身に付けて公立学校の教壇に立つ権利を主張して、バーデン・ヴュルテンベルク州を相手に裁判をおこしたのは1998年のことであるが、シュヴァルツァーによれば、ルーディンの動機ははじめてから宗教的なものではなく、政治的なものだったという。現在ルーディンはベルリンの「イスラム・コレク」という学校で教鞭をとっているが、これは原理主義的傾向をもつイスラム組織「ミリ・ゲリュス (Milli Görüs)」の系列校であり、そのことから彼女の政治的志向性は明らかだというのである。またシュヴァルツァーは、カールスルーエの憲法裁判所で近々出される予定の、この件についての判決を見越して、ムスリム女性のスカーフはイスラムのシンボルではなく、少数のイスラム原理主義者のシンボルなのであり、それに対して寛容な判断がなされるとすれば、それは異文化に対する寛容性の誤った解釈だと苦言を呈している。

その後Spiegel [2003/40] は、憲法裁判所でルーディンの裁判についての判決が出されたのを受けて、スカーフ問題に関する特集を組んでいる。その判決は、一言で言えば、「何も決めない」ことを決めた、というものであった。つまり憲法裁判所は、この件についての判断を回避し、連邦の各州の判断に委ねるという立場を取ったのである（ドイツでは教育行政は各州がイニシアティブを持っている）。これを受けて『シュピーゲル』は全16州にアンケート調査を行っている。それによれば、公立学校での教師のスカーフ着用に対して賛成が8州、反対が8州¹⁸と、まさに意見はまっぴたつに分かれている。Spiegel [2003/40] のこの特集は、現在のドイツにおけるイスラム問題を幅広く論じているが、全体としてイスラム原理主義批判というトーンになっており、スカーフ問題なども一部の過激なムスリム勢力が扇動しているという視点を取っている。ドイツ在住のムスリムに対するアンケート調査¹⁹の結果が、その証拠として挙げられている。それによると、「毎日祈る」人は36%、「モスクを頻繁に訪れる」人は22%、「ムスリム女性は公共の場でスカーフを着用すべきだと思う」人は27%と、全体としてドイツに住むムスリムの多数は非常に熱心な信者というわけではなく、スカーフ問題にも寛容であるという結論が導き出されている。Spiegel [2003/43] もまたこの問題を取り上げているが、その趣旨は前の二つの記事とは異なっ

ている。そこで問題とされているのは、「他の宗教的シンボル」についてである。記事によると、現在11の州でスカーフ禁止の法制化が進められているが、その中でCDU（キリスト教民主同盟）やCSU（キリスト教社会同盟）が政権を握っている州では、公立学校でのイスラムのスカーフ着用は禁止するが、キリスト教の十字架や修道服、ユダヤ教のキパ（ユダヤ教徒の男性がかぶる帽子）は認めるという法律を作ろうとしているという。しかしこれは明らかにダブル・スタンダードであり、平等を原則とするドイツの基本法に抵触するから、憲法裁判所で審議されることになる、負けることははっきりしている、というのが趣旨である。

Spiegel [2003/45] も同様に、スカーフのみを禁止する法律を早くも（先述の憲法裁判所の判決から34日後に）成立させたバーデン・ヴュルテンベルク州の事例を、批判的な視点から紹介している。

3-4 スカーフ問題のドイツ的特質

ここまでドイツにおけるスカーフ問題と、それに関する議論を概観してきたが、ここから分かるようにドイツの事例は、比較的シンプルなフランスにおけるスカーフ問題への対処と比べると、いくらか複雑であるように見える。ここでは、その背景について考えていきたい。

まず第一にドイツがフランスとは異なる点は、ドイツにおいては政教分離の原則がフランスほどは徹底されていないことにある。ドイツではカトリックやプロテスタントの教会は、その他の宗教団体とは異なり、公法上の公認団体として特別な地位を得ている。これによりドイツでは、公教育のカリキュラムにもキリスト教の宗教教育があるし、国家が教会税の徴収を代行するということが行われている。また現在は野党であるが、ドイツにおける主要政党である中道右派のCDU（キリスト教民主同盟）やCSU（キリスト教社会同盟）は、名前が示すとおりキリスト教に依拠する政党である。

それゆえ第二に、CDUやCSUが政権をにぎっている州では、フランスのようなあらゆる宗教的シンボルを禁止する法律が作られることは考えにくい。そのことはまた、ドイツがフランスのような中央集権的国家ではなく、各州の独立性の高い地方分権的な連邦国家であることも関係している。Spiegel [2003/40] が論じているように、連邦の憲法裁判所がスカーフ問題についての判断を各州に委ねる判決を出してしまったために、この問題に対する国家の統一した見解が示されることはなく、事態の複雑さに拍車がかかることとなった。また現在連邦政府の与党である中道左派のSPD（社会民主党）と緑の党は、キリスト教とは一定の距離をおいている政党であり、基本的には全ての宗教的シンボルを禁止すべきだという立場をとっているが（『シュピーゲル』のスタンスもこれに近い）、その際にも次のような問題が残ることになる。

つまり第三に、ドイツはナチスの時代にユダヤ人の大虐殺（ホロコースト）を起こしてしまった過去があり、ユダヤ人の権利を制限するような「反ユダヤ的」な政策をとることには、いかなる政治的立場をとるにせよ、消極的にならざるを得ないということがある。あらゆる宗教的シン

ボルを禁止するという、フランスのような首尾一貫した政策をとると、それはユダヤ人のキバなどをも禁止することになり、問題が生じるのである²⁰。

第四に、ドイツには2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ以降、イスラム過激派・テロリズムに対するひととき強い警戒心が存在する。というのも、9.11テロの実行犯であるモハメド・アタをはじめ、10人のテロ関係者がハンブルクの大学に在籍しており、いわばそこがテロの拠点となっていたという事実が明らかになったからである²¹。この「ハンブルク・グループの衝撃」は、ドイツ人のイスラムに対する警戒心を高め、イスラム原理主義的な運動に対する非妥協的な世論を生み出すことになった。

このようなドイツ特有の諸事情により、スカーフ問題に対する対応は、フランスの場合と比べると、より複雑で曖昧なものになっていると考えられるのである。

3-5 ドイツにおけるその他のイスラム問題

スカーフ問題以外にも、イスラムが取り上げられている記事は数多い。イラク戦争関係の記事を除いても、Spiegel [2003/18], [2003/42], [2004/23], [2004/24], [2004/26], [2004/31], [2004/33], [2004/47], [2004/50] などが挙げられる。

例えばSpiegel [2004/47] は、スカーフ問題とも関係する、ドイツにおけるムスリム女性の現状について特集を組んでいる。その詳細な特集記事（多くのムスリム女性が匿名で登場する）の中で報告されているのは、ドイツにおいてもムスリム女性の多くが、自らの意志に反する結婚を強制されたり、行動の自由を奪われたり、夫などからのドメスティック・バイオレンスに苦しむなど、いかに悲惨な状況に置かれているかといったことである。調査によれば、ムスリム女性の約38%が暴力にさらされており、またそうした女性を救うための「女性の家（Frauenhaus）」に駆け込む女性の約30%がムスリム女性だという²²。

その他の記事の多くが問題にしているのは、やはりドイツ国内におけるイスラム原理主義的な動き、あるいはイスラム過激派・テロリズムについてである。Spiegel [2003/42] は、ボンにある「ファハド国王アカデミー」というサウジアラビア系のイスラム学校が、原理主義的な教育を行うことでアルカイダ同調者を育てており、それゆえ学校を閉鎖させるべきだという議論がおこっていることを紹介している。またSpiegel [2004/24] は、ドイツにおけるイスラム過激派の中心人物であるメティン・カプランを特集で取り上げている。ドイツ政府は、このあからさまに武装闘争を呼びかける人物を国外に追放したいのだが、カプランは法の網の目をかいくぐってそれを阻止し続けており、そこに法治国家の弱点が露呈しているという。

またSpiegel [2004/31] は、ドイツ在住トルコ人の間でイスラム化が進んでいることを指摘する。ドイツのムスリム人口約330万人の中で、トルコ出身者は約260万人と、いわば最大勢力であり、その動向に対しては以前から高い関心が寄せられている。高度成長期には労働力として歓迎されたトルコ系移民だが、近年はむしろその多さが様々な社会問題を引き起こす要因になってい

る。その背景には近年のドイツにおける二つの大きな変化がある。第一に、1990年のドイツ統一の後、旧東ドイツ出身者の多くが失業者となり、職を持つ外国人労働者がその不満のはけ口となったことが挙げられる。また第二に、EU統合の進展やEU拡大が進むにつれ、かつては同じ立場だったギリシャやポルトガル、東欧諸国からの移民たちがEU市民として「一段高い」地位を得たのに対し、EUへの加盟が認められないトルコからの移民たちは、以前にもまして厳しい状況におかれるようになったことが挙げられる²³。こうした状況の中、トルコ系移民に対する差別が強まり、また彼らのゲッター化が進むことで、自らのアイデンティティの拠り所をイスラムに見出そうとする傾向が強まってきたと考えられる。Spiegel [2004/31] はノルトライン・ヴェストファーレン州に住むトルコ系住民を対象としたアンケート調査の結果を載せているが、それによれば2003年に自分は「宗教的」とであると答えた人の割合は71%で、これは2000年よりも14%増加している。また「非常に宗教的」という回答の割合は、同じ期間に8%から20%に増加しているという²⁴。この結果だけを見ても、これからのドイツにとって、イスラムがますます大きな意味を持つことは確実であるように思われる。

4. ドイツにおける新宗教

4-1 若者宗教 (Jugendreligion) について

他の先進諸国と同様、ドイツにおいても1960年代後半頃から、伝統宗教とは異なる様々な新宗教が現れてきた。ドイツでは当初それらは、主に若者を中心に広まっているという認識から、「若者宗教」と呼ばれた。この用語が一般に用いられるようになったのは、それら新宗教が様々な社会問題を引き起こすようになった1970年代から80年代にかけてであり、したがってこの言葉にはいくらかネガティブなニュアンスが付与されている。1980年には西ドイツ政府が『ドイツ連邦共和国における若者宗教』と題する報告書を公表し、具体的に8つの団体の事例を挙げながら、若者宗教の問題点を指摘した²⁵。報告書は、若者宗教を全面的に批判しているわけではないにせよ、「連邦政府は若者宗教への傾倒は現実逃避の一つの形式だと見ている」(国立国会図書館調査及び立法考査局編 [1997/36]) と述べ、その布教方法や集金活動などには問題があるとして、警戒を呼びかけている。

その後この若者宗教という言葉はあまり使われなくなり、最近では「セクト」(正確には「ゼクテ (Sekte) 」) が一般的になったが、その内実はさほど変わってはおらず、社会的な風当たりは依然として強い。1996年には、ドイツ連邦議会が『『いわゆるセクトと心理グループ』に関する予備調査委員会』を設置し、専門家を交えた議論の末、1998年に200ページを越える詳細な「最終報告書」を公表している²⁶。そこでもまた各種の新宗教団体は、監視と警戒の対象として記述されている。なお現在REMIDの資料には、ドイツにおける新宗教団体として、32の教団の名前が挙げられている(「REMID」のHPを参照)。

4-2 サイエントロジー

ドイツにおける新宗教の問題を取り上げた記事としては、Spiegel [2003/02], [2003/20], [2003/44], [2004/27] などが挙げられる。この内、Spiegel [2003/44], [2004/27] は、サイエントロジーの問題を扱っている。サイエントロジー教会は、1955年にアメリカでSF作家のラファエット・ロナルド・ハバードを中心として作られた教団で、ドイツにおける公称信者数は約3万人 (Gasper, et al [2001/969]) であり (REMIDは実質的な信者数を約6000人と推計している)、近年のドイツで最も問題視され、また話題にのぼることの多い新宗教教団である²⁷。

アメリカでは多くの著名人が信者に名をつらねているサイエントロジー²⁸だが、ドイツでは州によっては、この教団と関係を持つ企業は州政府と契約を結ぶことができないという法律が定められているほど、危険視されている。このことについて記憶に新しいのは、パソコンのOS「ウィンドウズ2000」をめぐる騒動であろう。1999年末に発売された米マイクロソフト社の「ウィンドウズ2000」に、サイエントロジーと関係を持つ企業の技術が使われているとして、ハンブルク州やバイエルン州でその採用の是非をめぐる議論がおこったのである。ドイツでサイエントロジーは、世間の人々が新宗教的なものに対して持つ忌避感のシンボリックな存在になっていると言えるであろう。

Spiegel [2003/44] は、サイエントロジーを擁護する発言をした教会史研究者の問題を取り上げている。ドレスデンのハンナ・アーレント研究所の所長であり、目下サイエントロジーについての研究書を執筆中のゲルハルト・ベジーアが、同教団のブリュッセル支部完成記念イベントで、この教団を擁護するスピーチをしたのである。1990年代にはドイツ社会への対決姿勢を露わにしていたサイエントロジーも、近年では災害被災者の救援活動や麻薬反対運動などを通して教団イメージの向上を図っており、また研究者などを教団シンパに取り込む動きを見せているという。ベジーアも教団に「取り込まれた」のではないかと、いうわけである。いずれにしても、この程度の発言 (彼のスピーチはたった3分間だった) が社会問題になること自体の内に、サイエントロジーが依然として置かれている厳しい状況が表れていると言えるであろう。なおSpiegel [2004/27] も、同じくベジーアをめぐる騒動をテーマにしている。記事を見る限りでは、単にサイエントロジーを (非難の対象としてではなく) 客観的な研究の対象にしようとしているだけの研究者の話題が、半年以上も論争的になっているわけである。

4-3 その他の新宗教をめぐる問題

Spiegel [2003/02] が取り上げているのは、ラエリアン・ムーブメントである。ラエリアンは、異星人に遭遇したというフランス人ジャーナリストのクロード・ボリロン (ラエル) が1973年に設立した新宗教団体である。この異星人こそが地球上の全ての生命の創造主であると主張するこの団体は、世界90カ国に6万人の信者をもつという。記事が論じているのは、2002年の年末に、この教団がクローン人間を作ったと発表した件である。この事件については、当時日本でも大き

く報道されたので、ここでその内容に詳しくふれることはしないが、彼らの主張の信憑性に対して疑問を投げかける識者の見解が付された紹介記事が、新聞紙面などを賑わしたのは、記憶に新しい。『シュピーゲル』も同様に、ポリロンに対するインタビューなどを掲載しながらも、基本的には懐疑的なスタンスで記事をまとめている。

またSpiegel [2003/20] は、ハノーファーに新しく作られた「カバラ・センター」の話題を取り上げている。カバラとは、12世紀に形成されたユダヤ教神秘主義思想であるが、カバラ・センターは、この思想の名のもとにアメリカで結成された、心理主義運動団体であり、世界中に50を超える支部を持つという。アメリカでは、歌手のマドンナなどがその信奉者であることでも知られるこの団体は、各種の入門セミナー（日本で言う自己啓発セミナーのようなもの）などで人を集め、最終的には多額の寄付を強要することで社会問題となっている。実際記事の中にも、36000ユーロをとられたという「被害者」が登場している。しかも、ハノーファー在住のあるユダヤ教のラビによれば、この団体はカバラとは全く関係のない「いかさま」であり、「ユダヤのサイエントロジー」のような存在だと言われている。

5. 大衆文化の中の宗教

最後にこの章では、大衆文化の中に表れた宗教的テーマについて論じてみたい。こうしたことについてふれたものとしては、Spiegel [2003/33], [2003/49], [2003/51], [2004/08], [2004/10], [2004/16], [2004/52] などが挙げられる。

Spiegel [2003/49], [2003/51] は、2003年に公開された映画「ルター²⁹」を取り上げている。このルターを主人公とする映画は、宗教改革の祖であり、また聖書のドイツ語訳をも成し遂げた偉人の生涯を、史実に忠実に描いた歴史物であり、その意味で少々地味な作品であったが、その年のドイツでの映画観客動員数第4位という健闘を見せた。6週間程の間に、約190万人が映画館に足を運んだという。Spiegel [2003/49] は、同じくドイツでヒットした「ベルンの奇跡³⁰」（観客動員数第2位）などとならんで、「ルター」が成功した背景には、近年ドイツ人の間で増大する英雄願望があると分析している。日本と同様、第二次大戦の敗戦国であるドイツでは、長らく自分の国や歴史を肯定的に評価することがタブー視されてきたが、そうした意識が徐々に変わりつつあるというのである。国営放送であるZDFもドイツの歴史上の偉人を取り上げるテレビ・シリーズを放映しているというが、これなどはまさにドイツ版「プロジェクトX」といったところであろう。またSpiegel [2003/51] は、特集でルターを取り上げ、詳細な伝記的記述とともに、現代的視点からこの人物の持つ歴史的意義を再検討している。

またSpiegel [2003/33], [2004/10], [2004/16] は、2004年に公開されたメル・ギブソン監督の映画「パッション³¹」を取り上げている。イエス・キリストが十字架にかけられるまでの最後の12時間を、徹底的なリアリズムで描いたこの作品は、とりわけキリスト教圏の国々で大ヒットを記録し、また論争を巻き起こした。Spiegel [2003/33] は、まだ制作途中のこの映画について、

既に反ユダヤ主義的な面が懸念されていることを紹介している。先にも述べたように、ドイツはその歴史から、ユダヤ人問題には非常に敏感であり、この映画についても他の国以上に大きな議論が起こった。「キリストを殺したのは誰か」という2000年来の疑問が、再び問題となったわけである。Spiegel [2004/10] は、映画公開後の国内外での様々な論争を紹介している。ギブソン自身は反ユダヤ主義的な意図はないと明言しているものの³²、やはり多くのユダヤ人団体などから非難の声が寄せられているという。ヨハネ・パウロ2世がこの映画を評価する発言をした（後にバチカンが否定）という報道も、この論争に拍車をかけることになったが、記事は、この映画をきっかけに、カトリックとユダヤ人との関係が、第2バチカン公会議以前に戻ってしまう恐れもあると指摘している。

6. おわりに

以上ここまで、主に『シュピーゲル』に掲載された宗教関連記事を手がかりとしながら、同時代のドイツにおける宗教について見てきた。以下で、簡単にそれらを振り返ってまとめてみたい。まずキリスト教については、基本的に「持続的な世俗化傾向」が支配的であることが確認された。カトリック、プロテスタントそれぞれの教会を脱会する人々の数が、今後急速に減少することは考えにくい。一部で原理主義的な動きが見られるものの、それはドイツにおいては、あくまで部分的な現象にとどまるであろう。ただし、キリスト教が文化としてはむしろ安定した位置を保っていることは、映画などの大衆文化において宗教的主題が繰り返し取り上げられていることの内に、見て取ることができる。現代ドイツにおけるキリスト教は、真摯な信仰の対象としての性格よりも、ドイツ人たちが共有する文化的伝統としての性格を、より強く持つものであるように見えるのである。

また近年はキリスト教以上に話題になることの多いイスラムについても、その宗教的な内実というより、むしろ政治的もしくは文明論的な対立をもたらすものとしての側面が、主題化される傾向にあるとすることができる。その代表がムスリム女教師のスカーフをめぐる問題であるが、それはフランスなど他の国々とは異なる、ドイツ社会の特性を浮かび上がらせるものでもあった。グローバル化の進展により、国境を越えた人々の移動が加速してくるこれからの時代に、イスラムをはじめとする異なる文化とドイツがどのような関係を結んでいくのか、それはわれわれも自らの問題として注視していくべきものであるだろう。

伝統的な諸宗教とは異なる新宗教については、ドイツでも他の国々と同様に強い忌避感が存在する。とりわけドイツでは、サイエントロジーというアメリカ発の新宗教が、人々の強い拒絶の対象となっている。しかしキリスト教が唯一の正統宗教であった時代は既に過去のことであり、宗教的多元主義が現実のものとなりつつある現在、ドイツでもそうした新宗教に対して一定の「市民権」を与える必要が出てくるのではないだろうか。

ドイツにおいても確かに、教会離れの進行という意味での世俗化は着実に進んでいるようであ

る。しかしそれだけをもって、社会の中で宗教の持つ意味が薄れつつあると考えるのは、即断に過ぎるであろう。イスラムや様々なタイプの新宗教、そして本稿では触れることができなかったが、仏教など諸外国の宗教が、現代のドイツ社会において少なからぬ意義を持つに至っている³³。多元化する宗教が社会とどのような関係を結んでいくのか、今後も注目していく必要があるだろう。

- 1 本論文では取り上げることができなかったが、『シュテルン』も2004年に6号連続（[2004/47]～[2004/52]）で「6つの世界宗教」という特集を組んでいる。取り上げられているのは、掲載順に、仏教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、イスラム、道教／儒教、キリスト教であり、それぞれの宗教の歴史と現在が詳しく記述されている。こうした特集が組まれる背景には、キリスト教以外の宗教に対する関心の高まりがあると考えられる。
例えば『全世界資料2000年ワールド・アトラス』（imidas2000別冊付録、集英社刊、p.102）には、ドイツは「プロテスタント40.8%、カトリック34.8%」とある。
- 3 ここで言うプロテスタントとは、正確にはドイツ福音主義教会（Evangelische Kirche in Deutschland: EKD）に属するルター派、改革派、合同派の3宗派を指している。この他にもドイツには様々な中小のプロテスタントの宗派がある。
- 4 この逆転現象は、1998年に起こった（Spiegel [2004/42]）。
- 5 これについては、沼尻 [2002] を参照。
- 6 ドイツにおけるキリスト教の衰退現象については、Horstmann (Hg.) [2000] で詳細に論じられている。
- 7 <表4>は全体として、旧東ドイツの人々が旧西ドイツの人々よりも、また男性が女性よりも非宗教的であることを示している。
- 8 旧東ドイツ諸州で宗教離れが進んだ理由としては、他にも、この地域で多数を占めていたのが、世俗化を招きやすいプロテスタントであったことも挙げられる。
- 9 ドイツでは、国内のカトリックのトップであり、超保守派として知られるヨーゼフ・ラツィンガー枢機卿が同性婚反対論の急先鋒だが、彼は次期ローマ法王候補にも名前の挙がる（朝日新聞2005年3月1日朝刊「時時刻刻」の記事は、彼を8名の有力候補の内の1人として挙げている）実力者であり、政治の世界にも大きな発言力を持っている。ただしSpiegel [2003/42] は、彼のような極端な思想の持ち主が次期法王になる可能性は極めて低いと述べている。
- 10 こうした点については、沼尻 [1995] を参照。
- 11 本稿を書き上げたのは2005年3月末頃であるが、その直後の4月2日にローマ法王死去が報じられた。しかし法王が存命中であることを前提とした本論文の記述は、敢えて変更せずにおくこととした。
- 12 Spiegel [2003/42] には、次期法王の有力候補として14人の名前が挙がっている。この中で朝日新聞2005年3月1日朝刊「時時刻刻」でも名前が挙げられているのは、ディオニジ・テッタマンツィ（イタリア）、ジョバンニ・パティスタ・レ（イタリア）、フランシス・アリンゼ（ナイジェリア）、オスカル・ロドリゲス・マラディアガ（ホンジュラス）の4人である。
- 13 ただし現在の枢機卿の大部分は、現法王が在任中に選出した人々であり、法王と同じ保守的な志向性を持つ者が多いため、次期法王にもそうした人物が選ばれる可能性が高いことが指摘されている。
- 14 ただしSpiegel [2003/42] によれば、こうした法王の政治性についてはバチカン内部でも異論があり、非政治的な法王を求める意見も少なくないという。
- 15 「REMID」のHPによる。なおその内ドイツ国籍を持つ者は、約73万2000人にのぼる。

- 16 こうしたフランスにおけるスカーフ問題については、内藤 [2004] や小田中 [2005] を参照。
- 17 この宗教的シンボル禁止法の成立を理由として、イラクでフランス人記者 2 人が武装勢力に拉致される事件が起こったことは記憶に新しい。その後 2005 年 1 月までに、スカーフを脱ぐのを拒んで退学処分を受けたムスリム女子中高生の数は 40 人にのぼる（朝日新聞 2005 年 1 月 12 日朝刊「世界発 2005」記事による）。
- 18 ここでの賛成は、「賛成」と「どちらかと言えば賛成」を、反対は「反対」と「どちらかと言えば反対」を含んでいる。なお反対の 8 州のうち、6 州がスカーフ禁止の法律作成を計画している。
- 19 ドイツ在住のムスリム 2000 人に対するアンケート
- 20 それでも SPD と緑の党は、全ての宗教的シンボル禁止の立場を取り、結果として反ユダヤ的という批判を受けているが、内藤 [2004] によれば、これは「意図せざる結果」ではなく、パレスチナ問題でイスラエルに批判的な両政党の確信犯的な戦略である可能性があるという。
- 21 これについては、朝日新聞アタ取材班 [2002] を参照。
- 22 ドイツの全人口（約 8260 万人）に占めるムスリム住民（約 330 万人）の割合は約 4% であるから、この数字はかなり大きいと言えるであろう。
- 23 2004 年 5 月 1 日に EU は、中東欧諸国など 10 カ国を新たに加え、25 カ国体制になった。これに対し、冷戦時代の 1987 年から加盟申請をしているトルコは、いまだに加盟のめどがたっていない。その背景として、実質的にキリスト教文明圏である EU と、イスラム教徒が大半を占めるトルコとの間の宗教的差異が大きいことが指摘されている。
- 24 ただしこの結果は、先述の Spiegel [2003/40] で示された、ドイツにおけるムスリムは全体としてあまり宗教的ではないというデータと矛盾しているように見える。どちらがドイツのムスリムの実相を捉えているのか、更なる検討が必要である。
- 25 この報告書の邦訳は、国立国会図書館調査及び立法考査局編 [1997] に掲載されている。ここで挙げられている 8 つの団体とは、統一教会、神の子どもたち、国際クリシュナ意識協会、ディヴァイン・ライト・ミッション、サイエントロジー教会、超越瞑想協会、バグワン、アーナンダ・マルガである。
- 26 *Endbericht der Enquete-Kommission "Sogenannte Sekten und Psychogruppen"* Deutscher Bundestag 13. Wahlperiode Drucksache 13/10950 09. 06. 98 この最終報告書は、ドイツ連邦議会の HP（「Deutscher Bundestag」HP）からダウンロードできる。
- 27 ドイツのサイエントロジーについて、またとりわけその法律上の諸問題については、Werner [2002] が詳細に論じている。
- 28 しばしば名前の挙がる著名人として、俳優のトム・クルーズやジョン・トラボルタ、映画監督のオリバー・ストーン、ジャズ・ピアニストのチック・コリアなどがある。サイエントロジーに対するドイツの過剰なまでの拒絶的態度は、しばしばアメリカからの非難の対象となっている。
- 29 監督：エリック・ティル、出演：ジョセフ・ファインズ、アルフレッド・モリナ、ブルーノ・ガンツ他。ドイツ制作の作品だが、出演者たちは英語を話している。日本未公開。
- 30 監督：ゼンケ・ヴォルトマン、出演：ルイス・クラムロート、ベーター・ローマイヤー、サシャ・ゲベル他。ベルンの奇跡とは、1954 年サッカーのワールドカップ・スイス大会で、前評判の高くなかった西ドイツ代表チームが、当時世界最強と呼ばれたハンガリー代表を破って優勝したことを指す。この優勝は、第二次大戦の敗戦で自信を喪失していたドイツ人たちに、大きな希望を与えるものだったという。映画は、代表チームの面々、とりわけその主力の一人であったヘルムート・ランと、彼と親交のあるサッカーファンの父子、新婚旅行でスイスを訪れたジャーナリスト夫妻などを主な登場人物としながら、西ドイツ代表が「歴史的偉業」を達成するまでのプロセスを描いている。2003 年にドイツ（のみ）で大ヒットを記録し、関連本などが数多く出版された。日本未公開。
- 31 出演：ジム・カヴィーゼル、モニカ・ベルッチ、マヤ・モルゲンステルン他。新約聖書の 4 つの福音書を下敷きにしたこの作品は、全編アラム語とラテン語という当時の言語だけを用いるなど、そのこだわ

りが話題となったが、同時にキリストに対する残酷な暴力描写の執拗さ（アメリカではショック死する観客も出た）が、賛否両論を巻き起こした。

- 32 ギブソンは熱心なカトリックの信者として知られているが、Spiegel [2003/33] によれば、彼は「ホーリー・ファミリー」というカトリックのセクトに属しており、このセクトは第2バチカン公会議での改革に反対する立場を取っているという。バチカンが、キリストの死はユダヤ人のせいではないという見解をとるようになったのは、この公会議以降のことであるから、ギブソンの反ユダヤ主義疑惑は、映画製作以前から存在していたわけである。
- 33 こうしたドイツにおける仏教など外来宗教の現状については、例えばFocus [2004/16] が詳細にまとめている。それによれば、1994年にはドイツに約40の仏教教団があったが、それが2004年には約600に増加しているという。

現代ドイツにおける宗教の諸相

<表1> : Der Spiegel (2003~2004) 宗教関連記事一覧

年	号	カテゴリー	ジャンル	記事タイトル
2003	01	外国	イスラム	イスマイル派の指導者アガ・カンー社会的スターはグローバルに活躍する善行者
				カリム・アガ・カンへのインタビュー、預言者の子孫としての彼の役割について
		社会	宗教	テヘランの政権批判者は両親の政治的殺害をどのように解明しようとしているのか
2003	02	ドイツ	キリスト教徒	東ドイツ人を回心させる伝道者たち
		外国	セクト	人間創造者の欺瞞
				ラエリアンの指導者クロード・ポリロンへのインタビュー、彼の救済の約束と永遠の生への期待について
2003	03	ドイツ	教会	神は本当に見離したのか？
2003	12	ドイツ	教会	シュピーゲル対談、カトリック神学者ハンス・キュンク：ブッシュの戦争のキリスト教的モラルについて
2003	17	ドイツ	現代史	バチカンの機密書類保管所が教皇たちとナチスに関する記録を公開
				司教コンラート・フォン・ブレージングの抵抗
2003	18	社会	宗教	バグダッドにおける被迫害者のゲッターだったサダム・シティーが、イラクにおける新たな宗教勢力の発信源に
2003	20	ドイツ	信仰	新たな心理主義運動の奇妙な実践
2003	21	社会	教会	修道女たちは児童保育所でいかに子どもたちを虐待したか
2003	26	社会	イスラム	憲法裁判前のスカーフ論争に関するアリス・シュヴァルツァーの報告
2003	31	外国	インド	ゾロアスターの後継者をめぐる宗教闘争
2003	32	ドイツ	教会	同性婚をめぐる信仰闘争
2003	33	文化	映画	メル・ギブソンの新しいキリストについての映画が反ユダヤ主義と批判される
2003	40	特集		スカーフ論争とムスリム統合の困難さ
				ドイツ人改宗者はなぜイスラムを過度に厳格に解釈するのか
2003	42	ドイツ	イスラム主義者	ボンのサウジ系学校がアルカイダ同調者を引き寄せる
		海外	バチカン	重病の教皇ヨハネ・パウロ2世の後継者を考える
2003	43	ドイツ	宗教	スカーフをめぐる争いでCDU/CSU政権の州はカールスルーエでの敗北の危険を冒そうとしている
2003	44	ドイツ	セクト	サイエントロジーを肯定的に評価する教会史家
2003	45	ドイツ	ムスリム	学校でのスカーフを禁じるシュトゥットガルトの議案-全ドイツのモデルとなるか？
2003	49	ドイツ	教育	聖書に忠実なクリスチャンたちはなぜ義務教育に反対し子供たちを自ら教育しようとするのか
		文化	時代精神	「ルター」や「レンゲデーの奇跡」など映画やテレビのヒット作がドイツの英雄を称える
2003	51	特集		「ルター」や「レンゲデーの奇跡」など映画やテレビのヒット作がドイツの英雄を称える
2003	52	ドイツ	宗教	世界中で布教するドイツの原理主義的クリスチャン
2004	04	社会	宗教	イギリスのムスリム女性が誘拐された子供をイラクから取り戻す
2004	08	社会	宗教	シュピーゲル・インタビュー、ハンブルクの司教ハンス——ヨッヘン・ヤシュケ：司祭たちの隠し子について
		文化	作家	教会のかわりにモスクを：リュベックで不評を買ったギュンター・グラス

年	号	カテゴリー	ジャンル	記事タイトル
2004	10	文化	映画	メル・ギブソンによるキリストの受難の映画化——驚くほど率直な血に満ちた暴力の乱舞
2004	16	特集		世界宗教の始まりとしてのイエス・キリストの死
				「キリストの受難」：アラブ世界でもヒットするメル・ギブソン作品
				コーランにおけるイエス像
				シュテファン・ヴァールが語る今日の信仰
2004	19	ドイツ	宗教	崩れつつあるユダヤ人中央評議会の独占
2004	23	ドイツ	教会	足りなくなる司祭
		ドイツ	イスラム	リベラルなムスリムを脅かす過激派
2004	24	特集		イスラム指導者メティン・カプランの事件が法治国家の不合理な弱点を暴露する
				ドイツの隣国はいかにしてイスラムによる平和の攪乱に抵抗しているか
				ヨーロッパで最も厳しい難民保護法を成立させたオランダ
				ザールラント州首相ベーター・ミュラーへのインタビュー——移民流入問題で一致する必要性について
2004	26	社会	ムスリム	原理主義のエゾグズ家と彼らのインターネット・サイト「ムスリム市場」
2004	27	文化	サイエントロジー	ザクセン州が問題のある教会研究者を放逐する
2004	29	ドイツ	信仰	金儲けについての見解の相違が修道院と教団との間に不和をもたらす
		外国	イラン	テヘランの若者たちが宗教強硬派に背を向ける
2004	31	ドイツ	パノラマ	宗教的になるトルコ人
2004	33	ドイツ	ムスリム	イスラム教師を育成するドイツの大学
2004	42	ドイツ	教会	経済的窮乏がキリスト教徒たちに危機をもたらす
2004	43	ドイツ	イスラム主義者	連邦政府がテロ容疑者に対する対応を厳しくする
		ドイツ	学校	スカーフ禁止論争が修道女の服装も脅かす
2004	45	ドイツ	キリスト教徒	アメリカのセクトがプロテスタントの自由教会派を攻撃する
2004	47	特集		権利を奪われた女性たち：ドイツでもムスリム女性たちは監禁され、虐待され、強制的に結婚させられている
				女性解放論者アリス・シュヴァルツァー、ドイツ人とムスリムとがつきあっていくことの困難さについて
				ドイツ生まれの若いトルコ人女性たちは、強制的な結婚からいかに自己防衛しているか
				シュビーゲル対談、オランダ人作家ハリー・ムリシュ：イスラム主義者のヨーロッパに対する挑戦について
2004	50	ドイツ	イスラム主義者	ベルリンのアラウィに対する暗殺計画？
				シュビーゲル論争、バイエルン州内務大臣ギュンター・ベックシュタイン(CDU)・FDP党首ギド・ヴェスターヴェレ：テロ危機の時代のリベラリズムについて
2004	52	特集		ダン・ブラウンのベストセラー『ダヴィンチ・コード』が宗教的想像力を喚起し、聖杯ブームを巻き起こす

現代ドイツにおける宗教の諸相

<表 2>：ドイツの宗教人口 (単位：人)

カトリック	26,466,000
プロテスタント	26,210,000
イスラム	3,300,000
東方正教会	905,000
新使徒教会	380,000
仏教	215,000
ユダヤ教	190,000
エホバの証人	166,000
ヒンドゥー教	98,000
人智学	15,000
サイエントロジー	6,000

「REMID」HPより作成。
代表的な宗派・教団をピックアップして信者数の多い順に並べた。

<表 3>：ドイツの教会脱会者数 (単位：人)

年	プロテスタント	カトリック
1970	202823	69454
1980	119814	66438
1985	140553	74112
1987	140638	81598
1988	138700	79562
1989	147753	93010
1990	144143	143530
1991	237874	167933
1992	361256	192766
1993	284699	153753
1994	290302	155797
1995	296782	168244
1996	225602	133275
1997	196602	123813
1998	182730	119265
1999	192880	129013
2000	188557	129496
2001	171789	113724
2002		119405

「Kirchenaustritt.de」HPより作成。なおプロテスタントについては1992年から、カトリックについては1990年から統一ドイツ全体の数値。

<表 4>：ドイツ人の宗教意識 (単位：%)

質 問		全 体	旧西ドイツ	旧東ドイツ	男 性	女 性
復活祭は、あなたにとって、	十字架にかけられ処刑されたキリストが復活したことを思い出させる祭りである。	45	50	25	36	52
	いつもと変わらないただの週末である。	52	47	68	60	44
あなたは、自分が宗教的な人間だと思いますか？	は い	52	58	29	44	59
	いいえ	47	41	70	54	41
あなたは、死後の生を信じますか？	は い	44	48	26	35	52
	いいえ	52	48	71	61	44
あなたは、神または超越的存在が実在すると信じますか？	は い	61	68	29	50	70
	いいえ	37	29	69	46	29

Focus [2004/16], S.130より作成。

〈参考文献〉

- 朝日新聞アタ取材班, 2002, 『テロリストの軌跡』草思社
ドイツ連邦共和国外務省編、2003、『ドイツの実情』非売品
Gasper, Hans, et al., 2001, *Lexikon der Sekten, Sondergruppen und Weltanschauungen*, Herder
Haack, Friedrich-Wilhelm, 1993, *Europas neue Religion, Sekten, Gurus, Satanskult*, Herder
Horstmann, Johannes (Hg.), 2000, *Katholisch, evangelisch oder nichts – Konfessionslose in Deutschland*, Katholische Akademie Schwerte
国立国会図書館調査及び立法考査局編, 1997, 『外国の立法201特集：宗教団体とカルト対策』紀伊國屋書店
内藤正典, 2004, 『ヨーロッパとイスラムー共生は可能か』岩波新書
沼尻正之, 1995, 「近代社会における『宗教』の位置ー世俗化論・再考」『ソシオロジ』40-1
沼尻正之, 2002, 「宗教市場理論の射程ー世俗化論争の新たな一局面」『社会学評論』53-2
小田中直樹, 2005, 『フランス7つの謎』文春新書
Riesebrodt, Martin, 2001, *Die Rückkehr der Religionen, Fundamentalismus und der "Kampf der Kulturen"*, Verlag C. H. Beck
Schorsch, Christof, 1988, *Die New Age Bewegung, Utopie und Mythos der Neuen Zeit, Eine kritische Auseinandersetzung*, Gütersloher Verlaghaus Gerd Mohn
Thomasi, Luigi (ed.), 1999, *Alternative Religions among European Youth*, Ashgate
Werner, Raik, 2002, *Scientology im Spiegel des Rechts, Strukturen einer subkulturellen Ordnung zwischen Konformität und Konflikt mit den staatlichen Normen*, Wilhelm Fink Verlag

〈参考雑誌〉

- Der Spiegel, 2003~2004 (これについては<表1>を参照)
Focus, 2004/16, "Titelthema: Gesellschaft: Was die Deutschen glauben"

〈参考ホームページ〉

- Deutscher Bundestag : <http://www.bundestag.de/>
REMID : http://www.remid.de/remid_info_zahlen.htm
Kirchenaustritt.de : <http://www.kirchenaustritt.de/>